

『何かある』を『良し』とする一年が守られますように

園長 野中 泉

新年あけましておめでとうございます。
今年もよろしくお願ひします。



皆さん、どんな年末年始でしたか。今年は、暦の偶然で年末年始に週末も重なり、私も 8 日間の長いお休みになりました。365 日中年末年始の 5 日間しか休まないアトムの園長になって 8 年目。急な長いお休みにうれしいような、お尻がソワソワ落ち着かないような、変な気分です。

なぜなら、アトムの日々で毎日仲間と言い合う言葉は「何もない日がないよね」だからです。言い換えれば「毎日が事件の連続」とも言えます。だからこそ、アトムが閉まっているこの 1 週間。「あの子は、元気にしているかしら?」「○○ちゃんの家は、お母さんお休み取れたかな?」と気になることが、次々に頭に浮かんできてしまうのです。

アトムに来たばかりの頃、次々に起こるもめごとや困りごとに翻弄されすぎて「なんで、アトムばっかり、こんなに毎日何かあるんでしょう?」とぼやいたことがあるのですが、大先輩たちに「他のところでも、人と人が暮らしていれば何かしらあるはず、それがアトムは表に出ている、他所は出でていないという違いだけ」と笑い飛ばされたことを思い出します。

言われてみれば、私たちは無意識に「何もない」を「良し」としようとしがちです。世の中でよく耳にする「何かあったらどうするんですか?」という言葉などは、実にそれを象徴しています。しかもそれが、保育園、学校、図書館、公園、公民館など、本来であれば、人が出会い、何かを学び、自ら考え動き出すことを促す公共空間にこそ「あれをしてはダメ」「これはできない」がいくつもあり、またその理由として「何かあったらどうするんですか?」「何かあったら困るので」という言葉があふれかえっているという現実を、私たちはどう考えたらいいのでしょうか。

同じようなモヤモヤを一生懸命考えようとしている人たちが、世の中にはたくさんいます。WEB 上で公開されている福祉をたずねるマガジン「こここ」の「言葉のもやもや歩き Vol. 01」に『何かあったらどうするんですか?』の向こう側」というコラムがあります。全文（3 人の方の寄稿）はぜひ検索し読んでほしいのですが、以下は、そのおひとり、12 年間在宅医療に携わってこられた平田節子さんの言葉です。

「自宅で治療を受ける患者さんの、一つの条件は「ひとりでは通院ができない」ことです。重い障害のある方や、難病の方などさまざまですが、医師から限られた命であることを告げられている末期がんの方も多くいます。「それならば自宅で過ごしたい。」とはいえ、その思いが実現しないこともあります。そのきっかけが、ご家族の「家にいて、なにかあったら心配だから」という声であることも少なくありません。

でも、「なにかあったら……」という言葉を聞くたびに、わたしは思います。

「なにかは、あります」

そう、なにかはあるんですよ。生きているのに、なにもなかつたら困るじゃないですか。」

命の最前線にいる方の言葉だからこそ、この「生きているのに、なにもなかつたら困るじゃないですか」というひとことがズシンと胸に響きます。人が生きて、育ちあい、共に生きるこの場所に、何もなくなったら、それは、もっともと、とてもなく、怖い。だから、今年は「何事もなく平穀でありますように」と祈らず、「健全に何かある毎日が、今年も守られますように」と祈ろうと思います。